



# ふたはの桂

京都府大広報 **No.178** | 2016.10

KYOTO PREFECTURAL UNIVERSITY



**特集1** 京都府立大学と京都府立総合資料館の新施設が完成

**特集2** 京都和食文化研究センターの取組

## CONTENTS

地域連携・地域貢献	— 6	地域連携・地域貢献	— 7	国際交流	— 8	イベント情報	— 8
各学部・研究科の取り組み	文学部	— 9	公共政策学部	— 9	生命環境科学研究科	— 10	
受賞情報	— 11	ニューフェース	— 12	退職教員からのメッセージ	— 12		

# 特集1

## 京都府立大学と京都府立総合資料館の新施設が完成

京都府により、平成25年7月から建設工事が進められてきた京都府立大学(文学部・附属図書館)と京都府立総合資料館の複合施設がこの7月に完成し、施設の名称が「京都府立京都学・歴彩館」と決まりました。

建物は、延べ床面積24,000平方メートルの規模で、京都の文化や歴史の研究を支援する「京都学研究部門」(仮称)も設置され、京都府立大学と京都府立総合資料館とも連携し、文化・学術の交流・発信拠点となります。

今後、移転準備を開始し、本年12月には施設の一部オープン、平成29年度には全面オープンを目指しています。



### 施設の概要

- ・総合資料館と府立大学の文学部・附属図書館を合築することで、図書・資料等をワンフロアー化し、府民の皆様へ提供します。
- ・新たに「京都学研究部門」を設置し、京都における歴史・文芸・産業・景観等、特色ある文化全般の研究を推進するとともに、その成果を広く国内外へ情報発信していきます。
- ・展示室、大・小ホール、ラウンジなど広く府民が集い交流する場を設置します。

### 建物の概要

地上4階地下2階 (延べ床面積 約24,000㎡)

階層	主な機能等	
1階	<ul style="list-style-type: none"> <li>・京都学ラウンジ・研究室</li> <li>・大ホール(固定484席)、小ホール(可動99席)</li> <li>・展示室(240㎡)</li> <li>・自主研究室(90席)</li> <li>・カフェスペース、ホワイエ、事務室、光庭等</li> </ul>	5,700㎡
2階	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総合資料館閲覧室、</li> <li>・府立大学・府立医科大学附属図書館閲覧室</li> </ul>	4,300㎡
3～4階	<ul style="list-style-type: none"> <li>・府立大学文学部・大学院文学研究科実習室、演習室、</li> <li>・教員研究室 等</li> </ul>	4,100㎡
地下1～地下2階	<ul style="list-style-type: none"> <li>・収蔵庫、書庫、機械室等</li> </ul>	9,900㎡



### 「京都学講座」の開催

京都府主催、本学共催により、京都学・歴彩館開設に向けたプレ事業として、古代日本の国際交流に焦点をあてた2回シリーズの京都学講座「古代文化の道～海を行き交う人・物・情報～」を開催しました。

#### ◇第1回 報告「遺跡からみる丹後と日本海交流」

講演「古代日本における海の道—「神宿る島」宗像・沖ノ島を中心に—」

6月18日(ウィングス京都 イベントホール)、参加者270名

#### ◇第2回 講演「本草の来た道—日本古代の医学・薬学—」

9月3日(本学稲盛記念会館)、参加者210名

第1回は、古代における日本海交流に焦点をあて、ユネスコ世界文化遺産候補に推薦されている宗像・沖ノ島と京都丹後を事例に、九州大学名誉教授で海の道むなかた館長の西谷正氏と宮津市教育委員会の河森一浩氏の2名の講師に御講演いただき、第2回は、遣唐使が持ち帰った当時の最新知識の一つ、医学・薬学に注目し、愛知県立大学教授の丸山裕美子氏に御講演いただきました。

当日は、古代史ファンをはじめ、受講者で会場は満員となり、盛会のうちに終了しました。



## 共同研究会の活動

京都学・歴彩館の京都学研究部門の活動の一つとして、「京都府域の文化資源」をテーマに共同研究会を立ち上げ、その成果を一般府民へ発信していく活動に本学も携わっています。共同研究会の活動は、概ね3ヶ年を1サイクルとして、1年目に研究レポートを作成し、2年目に報告書の作成と一般書籍の刊行、3年目には成果発表会の開催を予定しています。

平成27年度は「洛北」、平成28年度は「丹波」をテーマとして、それぞれの対象地域および近隣地域に所在する大学・研究機関、同地域と連携している大学の研究者で活動しており、両研究会へは本学の研究者も参加するとともに、京都府と協働し、研究会のとりまとめも行っています。

### 洛北の文化資源共同研究会参加メンバー

教員名	所属	テーマ
阿部 健一	総合地球環境学研究所 研究高度化支援センター 教授	文化としての洛北の自然
小出 祐子	京都精華大学デザイン学部 特別研究員	江戸時代の賀茂別雷神社における 造営について
齊藤 準	京都工芸繊維大学 工芸科学研究科 准教授	京都北山のヤマムコ類の活用と生 息環境保全
鈴木 久男	京都産業大学文化学部 教授	京都大原魚山勝林院に関する調査 研究
鳥居本 幸代	京都ノートルダム女子大学 生活福祉文化学部 教授	洛北小野の里と尚歯会
中村 治	京都府立大学 共同研究員 (大阪府立大学人間社会学部 教授)	雑煮と納豆餅
東 昇	京都府立大学文学部 准教授	近世後期における洛北長谷村の生 活と領主聖護院・天皇葬送
深町 加津枝	京都大学大学院地球環境学学 准教授	自然資源としての農山村における ササの利用と京都の文化
藤本 仁文	京都府立大学文学部 准教授	近世社会における賀茂葵信仰
渡邊 秀一	佛教学部歴史学部 教授	京都洛北地域の景観変化とその時 代的創造性—修学院村を中心に—

代表 金田章裕 (京都大学名誉教授・京都府立総合資料館館長)  
副代表 横内裕人 (京都府立大学文学部歴史学科 准教授)

### 丹波の文化資源共同研究会参加メンバー

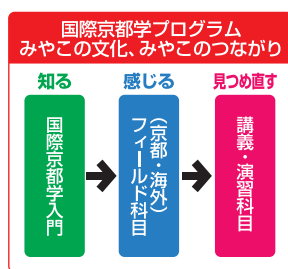
教員名	所属	テーマ
伊勢 武史	京都大学フィールド科学教育研究セ ンター 准教授	丹波の森林資源が京都に与えてき た多面的な役割についての考察
井上 一稔	同志社大学文学部 教授	丹波の仏像彫刻史
大場 修	京都府立大学大学院 生命環境科学研究科 教授	丹波地域の民家・集落・町並み
河原 典史	立命館大学文学部 教授	美山のかやぶき民家をめぐる文化 資源
久保 雅義	京都工芸繊維大学 デザイン・建築学系 教授	福知山における鉄道 (JR) 資源の 影響
斉藤 利彦	佛教学部歴史学部 准教授	京都府史蹟勝地調査と西田直二郎
高橋 克壽	花園大学文学部 教授	丹波地方の弥生〜古墳時代
原 雄一	京都学園大学バイオ環境学部 教授	歩く道をプラットフォームとした 地域資源の可視化
矢口 芳生	福知山公立大学地域経営学部 教授	農法および農村文化等の独自性に 関する研究
山本 浩樹	龍谷大学文学部 教授	明智光秀の丹波支配について

代表 金田章裕 (京都大学名誉教授・京都府立総合資料館館長)  
副代表 藤原英城 (京都府立大学文学部長 日本・中国文学科)

## 京都府立大学文学部「国際京都学プログラム」 豊かなフィールドへ

文学部では「国際京都学プログラム」を必修として開設しています。「みやこの文化、みやこのつながり」をテーマに、国際的な視点を取り入れ、文学・言語・歴史・文化遺産・芸能など、さまざまなジャンル・研究分野から京都文化を学びます。

文学部の3学科(日本・中国文学科、欧米言語文化学科、歴史学科)が共同して行う入門講座「国際京都学入門」を始め、それぞれの学科の特色を活かした「国際京都学講義」「国際京都学文献演習」などの講義・演習科目、また教室を離れて京都を実感する「国際京都学フィールド演習」「京都文化学フィールド演習」「文化遺産フィールド政策論」や異文化体験を通して海外へ京都を発信する「世界遺産都市研修(ドイツ・オーストラリア)」など、国内外でのフィールド科目も展開しています。



文学部ではこれまでも京都府立総合資料館との間でさまざまな共同事業を行ってまいりましたが、総合資料館の京都府立京都学・歴彩館への衣替え、また文学部の移転と相俟って、さらなる研究・教育上の連携が期待されます。京都学・歴彩館所蔵の古典籍や歴史資料、また府大図書館とワンフロア化した閲覧室や京都学関連スペースの活用など、「国際京都学プログラム」のさらなる充実が見込まれます。

豊かな伝統文化を伝える京都の多様性を知り、時代とともに変化してやまない国内外のフィールドへ自ら分け入り、体感し、そして再び京都を見つめ直す。文学部の「国際京都学プログラム」は多彩な京都文化に見出される特殊性と普遍性、世界の中の京都をアカデミックに探究します。



## 特集2

### 京都和食文化研究センターの取組

京都府立大学では、平成31年4月「和食文化学科（仮称）」開設の準備を進めています。

平成25年「和食：日本人の伝統的な食文化」のユネスコ無形文化遺産登録に先立ち、フランス美術術、メキシコ伝統料理、地中海食文化が登録され、ローマ大学（イタリア）やトゥールーズ大学（フランス）など、海外では高等教育機関による食文化研究が活発化しています。

加えて、近年の世界的な和食ブームで、料理・調理に携わる方たちばかりでなく、食品産業などサービス・製造等の実業界、産業界でも和食文化を学ぼうとするニーズが高まっています。

一方、文化庁京都移転の決定や京都学・歴彩館の竣工など、「文化首都・京都」に相応しい環境整備も進行しています。

こうした中で、京都和食文化研究センターでは、世界の食を巡る無形文化遺産と交流を図りつつ、和食の文化的価値（京都の歴史、文化、芸術、学術、技術、伝承、智恵等）に着目した世界最高水準の「和食文化学」の教育・研究拠点を日本の伝統文化の中心・京都に設置するため、京都府及び関係機関と連携しながら下記の取組を推進しています。

#### 和食文化に関する教育

28年度は学科開設時の必修基礎科目と想定する科目を始め、人文・社会分野、健康・栄養分野、環境分野等の分野で29科目を提供し、延べ約1,200人が受講されています。（一部は京都工芸繊維大、京都府立医大の学生や社会人の方も受講されています。）これらの科目のうち、特徴ある科目を紹介します。

##### ①食文化原論（必修科目） 担当 佐藤 洋一郎 特任教授

食することは文化であり、歴史の中でどのように発展し、人類がどのように恩恵を受けてきたのかについて基礎的な理解を得るとともに、日本人が和食文化にどのような価値を伝承してきたのかについての関心を深め、和食文化の学びへの動機付けを行う。

##### ②実学「和食」（選択必修科目）

担当 山下 満智子 特任教授

京都の和食を支える刃物、鍋・釜、市場や清水焼等の歴史を概観し、料亭見学、調理実習を通じて京料理を体験する。江戸時代から続く杉本家の祇園祭りの室礼を通じて、受け継がれてきた京の暮らしについて考える。



今日庵での薄茶点前体験



錦市場老舗刃物店「有次」実習

##### ③和食文化論（選択科目） 担当 上田 純一 特任教授

和食の成立とその発展を支えてきた日本文化を総合的に探ることから和食文化を体系的にとらえる視点を養う。日本の食の歴史を深く探り、世界との比較を通じて日本文化を創造的に探究しつつ和食文化の未来を開く力を養う。

##### ④食と健康の科学（選択科目）

担当 東 あかね 副センター長

日本人の食と健康の現状を疫学、調理学、食品科学等の科学的な観点を中心にオムニバス形式で概観する。

##### ⑤食環境をめぐる国際社会と日本（選択科目）

担当 宗田 好史 センター長

グローバルな視点で食糧の状況を俯瞰し、国際社会における食糧をめぐる課題について、法律、経済、政策から学び、課題解決のための方策を討議する。

##### ⑥フードビジネス論（選択科目） 担当 中村 貴子 講師

キッコーマン株式会社の御協力により、第一線のビジネスマンからオムニバス形式で様々な分野のフードビジネスを学ぶ。

#### 和食文化学研究

前例のない「和食文化学」の知的体系化のため、3つの領域で本格的な研究をスタートしています。

今後、「和食文化学」の柱に沿って研究分野の質の一層の拡充を図り、「和食文化の大学コンソーシアム」や「和食文化学会」への発展につなげるとともに、国際セミナーを開催し、研究成果を国内外に発信します。

##### ①「食文化論」基盤整備研究 主宰 佐藤 洋一郎 特任教授

人類にとって食は何かという人類生存の根本的問いに関わる関連諸学（農学・生態学・社会学、歴史学、哲学、倫理学等）の研究成果を統合させ、超学際領域としての「食文化原論」の

基盤整備を図る。

##### ②京料理形成過程に関する歴史研究 主宰 上田 純一 特任教授

京料理形成の過程を歴史的に考察し、その文化的価値を学術的に裏付け、京料理を通じた京都文化のアイデンティティ形成に寄与する。

##### ③日本食文化史研究 主宰 国士舘大学 原田 信男 教授

従来の文化史、歴史学、民俗学、考古学領域では取り上げられなかった日本の食を、料理様式、料理人、料理屋、飢饉など複数の視点から通史的に究明し体系化を図る。

## 社会貢献

平成26年度から毎年、和食文化の真髄に触れ、その奥深く幅広い文化的背景を理解するための一流講師陣による「リカレント学習講座」を実施しています。28年度は下記により開講の予定ですが、すでに定員を超える申し込みをいただき、受付は終了しています。

### 〈28年度開講予定〉

	テーマ	講師
第1回(28.10.8)	「文献・仏典にたどる京料理の歴史 ～懐石料理を中心に」	和食文化研究センター 上田 純一 特任教授
第2回(28.11.12)	「日本文化の根幹としての宴会を考える ～酒と菓子の視点から」	(公財)有斐斎弘道館 太田 運 代表理事 文教大学 中村 修也 教授
第3回(28.12.10)	「京とすし文化、京の鯖寿司」	鯖寿司いづう 7代目当主 佐々木 邦泰 氏 和食文化研究センター 日比野 光敏 客員教授
第4回(29.1.7)	「京のおばんざいと旧家の食のしきたり」	和食文化研究センター 今井 幸代 客員教授
第5回(29.2.11)	「DNAでたどる和食2000年の歴史 ～日本人は何を食べてきたか」	和食文化研究センター 佐藤 洋一郎 特任教授



## 学外連携

すでに平成27年度に、大阪ガス株式会社、カゴメ株式会社、キッコーマン株式会社、特定非営利活動法人日本料理アカデミーの3社1法人と包括連携協定を締結し、開講科目への講師派遣をいただくなどの連携を進めています。

また、本年8月には、(公財)京都文化交流コンベンションビューロー、(公財)大学コンソーシアム京都と連携し、日本留学を検討する外国人学生17名を対象に「和食文化」「精進料理」についてレクチャーを提供し、精進料理仕出し老舗「矢尾治」御主人が丹精こめて作られた本格的な精進料理を味わっていただきました。

その他、6月にはカリフォルニア州立大学の短期留学生を対

象とした「和食の基本」に関するトークと出汁試飲体験を実施するなど、今後も大学のまち・京都の強みを活かした和食文化の国際発信に向けて取組を進めてまいります。



kyoto study program  
留学検討中の学生に「精進料理」講演

## 今後に向けて

29年度からは、「和食文化学科(仮称)」開設に向けた取組を一層加速してまいります。

関係諸氏のますますの御支援と御協力をお願いいたします。

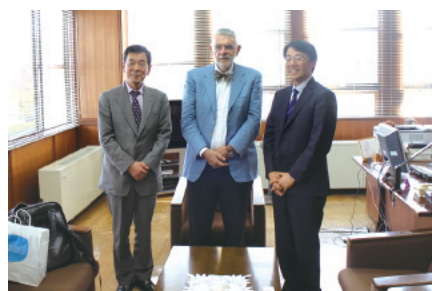
### 和食文化学科(仮称)の概要

学科名称	和食文化学科(仮称) Department of Japanese Diet Culture(仮称)
入学定員	30～40名(検討中)
修業年限	4年
授与学位	和食文化学士(仮称) Bachelor of Japanese Diet Culture(仮称)
開設年度	平成31年度予定
開設場所	下鴨キャンパス内(京都市左京区)

※上記概要は構想段階のものであり、文科省、京都府、京都府立大学法人本部等との協議調整で変更することがあります。



京懐石「竹茂楼」  
会食作法体験



和食文化を国際発信するために  
宗田センター長、ローマ大学モンターナリ教授、築山学長

地域連携・地域貢献

府内の地域振興や産業・文化の発展等に貢献する地域貢献型特別研究 (ACTR)

京丹後市内における学校・公民館・寺社などの地域史資料の調査・整理・保存に関する研究

文学部 歴史学科 小林 啓治 教授

長い歴史を持つ小学校には、戦前からの学校資料が数多く残っています。廃校になった小学校の資料を収集・仮保管している京丹後市教育委員会の要望を受けて、近代文化遺産の整理・保存及び地域コミュニティの記録遺産を保存し、地域の歴史を未来につなぐという観点から2年間にわたって研究を進めてきました。その結果、保存のための目録の作成に加え、特に貴重な史料である戦時下の国民学校の様子を伝える学校日誌などを活字にして保存しました。また、公民館史料や婦人会文書など学校以外の地域に残る資料も合わせて研究を進め、「丹後の村から見た戦争」展や「大丹後展—日本のふるさと」を企画・実施し、広く府民にお知らせすることができました。展示会では本学大

学院生がパネル等を使ったわかりやすい解説を行い、好評を博しました。

人口減少や生活環境の激変による地域コミュニティの弱体化とともに、地域の歴史・文化も失われつつある中、地域に根ざし、生活文化を大切にす地域社会の再生・発展のためには、失われ行く地域の歴史を記録・分析する本研究の果たす役割は大きく、また、展示をご覧になった地域にお住まいの皆様もいっそう地元への愛情が深まったことと思います。



平成27年12月12日に京丹後市で行われた「大丹後展シンポジウム」

赤れんが倉庫群と周辺地域をつなぐエコミュージアム構想の研究

公共政策学部 公共政策学科 杉岡 秀紀 講師

舞鶴市では、旧海軍舞鶴鎮守府の赤れんが建造物が数多く残っており、その多くが重要文化財に指定されています。平成24年に「舞鶴赤れんがパーク」がオープンし、赤れんがの発信や様々な観光イベントなどに活用されています。

この赤れんがをまちづくりに活かそうと、平成25年度から本学の教員と学生が、舞鶴市民(事業者、行政、NPO など)と「舞鶴赤れんがまちづくり研究会」を設立し、研究を進めてきました。具体的には、3年間かけて海外も含む他市で造られた赤れんがと舞鶴赤れんがの比較や先進地域の取組事例などを調査しました。また、平成26年度に提案した「舞鶴エコミュージアム構想」を実行に移すために、平成27年度には食の情報発信として「舞鶴揚げ」という商品を開発しました。また舞鶴市地産地消赤れん

が「QBB:クイックビルド・ブリック」の販売装置として、「赤れんがガチャ」を考案し、2点とも府大の学園祭である「流木祭」で販売を行い、好評を博しました。

なお、本研究はゼミ教育とも連動させ展開したこともあり、(公財)大学コンソーシアム京都の「京都から発信する政策研究交流大会」で京都市長賞を頂いたり、日本地方(地域)政治学会でも学生が発表したりと学生も大きく活躍してくれました。

これらの取組を通して、舞鶴における新しいアプローチでの赤れんがへの魅力を発掘、発信、そして現地・現物・現実にこだわったまちづくり政策の提案と実践ができたと思います。



品質を保ちつつ、効率的に楮の樹皮の黒皮を削り白皮にする方法、及び、樹皮や残った芯の和紙以外への有効活用

生命環境科学研究科応用生命科学専攻 高分子材料設計学 細矢 憲 教授

綾部市の黒谷和紙は、約800年前、戦に破れた平家の落武者が作り始めたといわれ、京都府の無形文化財に指定されています。この和紙の原料であるコウゾはクワ科の植物。蒸した後、外皮を剥がし、精製して粉碎したものが和紙原料になりますが、皮以外は利用されずに捨てられる事が多いため、「コウゾの丸ごと有効利用方法」の研究を開始しました。

コウゾの芯の断面はたくさん穴があいており、きれいな構造をしています。これを焼いて炭にしたところ、構造を維持したまま炭化できました。この炭は、アンモニア等の悪臭成分をはじめ、トルエン等の気化する有機化合物をよく吸着し、その能力は代表的な竹炭にも劣らないことが分かりました。また、この炭は、比重が0.2と小さく、自重の3倍の水を吸い上げ、通水も可能

で、濁り水等の浄水に大きな力を発揮することも分かったので、地元の飲料用水や観賞魚用の水の浄化に使用できないか実証実験をしているところです。

併せて、地元農家に協力していただき、効率的なコウゾ炭の製造についても研究し、もみ殻を焼いて燻炭(くんたん)を作る際にいっしょにコウゾの芯を焼くことで、使い勝手の良い長い炭ができることが証明されたので、今後は、地元の黒谷和紙と組み合わせ、見た目にも癒やされ、環境も浄化するような製品の開発に取り組んでいきます。



燻炭製造装置で作成したコウゾ炭

## 地域創生COC+教育プログラム

### 宮津市で地域創生フィールド演習“トライアル版”を実施

今年度からスタートした「地域創生COC+教育プログラム」では、京都府中・北部地域の自然や文化を活かして様々な生業を営んでおられる「地(知)の案内人」を訪ねて学ぶ「地域創生フィールド演習」を平成29年度から実施することとしていますが、平成28年7月22日に宮津市内で“トライアル版”として模擬演習を実施しました。

模擬演習は、COC+「地(知)の案内人」であるNPO法人天橋作事組理事長大村利和氏の協力により、京都府立宮津高等学校建築科生徒とのまち歩きと天橋作事組メンバーとの合同による宮津市溝尻の舟屋を調査するものです。

午前中は班に分かれて、まち中の重要文化財に指定されている建築物や町並みなどを見て歩き、高校に戻ってまち中の地図の上に写真やコメントを書き添えるワークショップを行いました。歴史的な建物や旧城下町の町割りの中に、今の暮らしが溶け込んでいる様子を高校生らしい視点で捉えていました。

午後からは、国の重要文化的景観の選定を受けている「宮津天橋立の文化的景観」の重要な構成要素である溝尻の舟屋約40戸の内、10戸を調査しました。調査は宮津市教育委

員会の協力のもと実施しました。小屋の建物の様子や中の道具類、舟の様子などを詳しく見ることができ、漁業の生業と景観との関係が良くわかり大変参考になりました。

参加した学生は「溝尻の写真SNSでアップしたら、たくさんの友達から「きれい、行ってみたい」といった反響があり、大学の演習を通じてもっと地域と関わりができていいと思いました」と感想を述べました。

このような高大連携や地元専門家・NPOの方々との協働によるフィールド演習は、地域創生における教育や人材育成として有益であるばかりでなく、地域の歴史・文化・景観といった貴重な資源を次世代に伝える良い機会にもなるものであり、今後も力を入れてまいりたいと考えております。



京都府立宮津高校建築科の生徒たちとのまち歩き



溝尻の舟屋での調査の様子

## 京都銀行と京都府公立大学法人との包括連携・協力協定を締結

京都府公立大学法人及び京都府立医科大学、京都府立大学は、株式会社京都銀行との連携・協力の取組を今後一層推進するため、平成28年7月7日に地域創生に関する包括連携・協力協定を締結しました。

京都銀行は、平成27年3月に、「地域創生プロジェクト」を立ち上げ、地方公共団体との連携協定の締結をはじめ、積極的に幅広い分野での連携を進めることにより「地域創生」を推進しています。

一方、本学は、京都府の大学、府民の大学として、地域貢献、地域振興を大学の理念の一つに据えて、教育・研究活動を行っています。研究面では、地域課題に応える様々なプロジェクトが推進され、地域創生に向けた自治体・地域団体の活動との連携強化を図っています。

本協定は、それぞれが持つ資源を効果的に活用することに

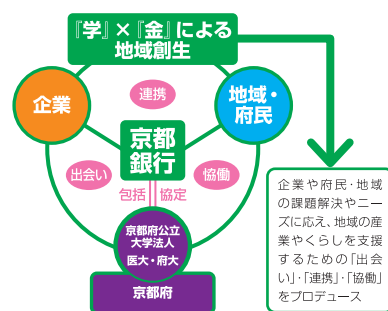
より、産業振興、人材育成、学術振興等の幅広い分野の課題解決や地域貢献に積極的に取り組み、地域創生の一層の推進に寄与するものです。

地域に最も近い府立2大学と銀行として連携し、今後も京都の地域産業の発展や豊かな暮らしの実現に向けて尽力していきたいと考えています。

包括連携・協力協定では、今後、次の事項について連携協力を進めて行くこととしています。

- (1) 地域の知の拠点としての地域創生推進に関すること
- (2) 地域経済の活力の創造に関すること
- (3) 地域の人材育成に向けた取組みに関すること

両大学の研究成果と地域とつながりの深い京都銀行のネットワークや情報の相互活用、地元企業の商品開発・改良支援、両大学と医療・バイオ等関連企業との共同研究などに取り組むとともに、この連携を通じて、大学生が大学で学ぶだけでなく、キャンパスを離れて地域や現場で学ぶ機会として、京都の未来を拓く人材の育成に取り組んで行く予定です。



## 国際交流

### ■ トゥール・フランソワ=ラブレール大学(フランス)と学術交流協定を締結

生命環境科学研究科 応用生命科学専攻 大島一正 助教

本年の6月にフランス共和国のトゥール・フランソワ=ラブレール大学と学術交流協定を締結しました。トゥール・フランソワ=ラブレール大学(以下、トゥール大学)は、ロワール県の県庁所在地、トゥールに設置された国立大学であり、フランソワ=ラブレールという名前は、ロワール県出身の作家にちなんでいます。設立年は1970年と比較的新しいですが、芸術、文学、ルネサンス、法学から工学、医学、理学まで総数11の学部を要する総合大学です。大学の規模としては、教職員数が2,450名ほど(うち研究職員は1,350名ほど)、学生数は25,000人ほど(うち3,000名ほどは留学生)です。

トゥール大学には幾つかの付属研究所があり、その一つに本交流協定での主な共同研究先である Institute of Research on Insect Biology (フランス語では Institut de Recherche sur la Biologie de l'Insect となるため IRBI と略します)があります。IRBI が掲げている主要な研究テーマの1つに「昆虫と植物の相互作用」があり、これまでも日本学術振興会の外国人招へい研究者制度等によって IRBI の研究者が本学に共同研究員として滞在するなど、活発な研究交流が行われてきました。

さて、上記のように活発な研究活動を伴う国際交流を行う際、世界を飛び回るのは研究職員だけではありません。研究活動が活発になればなるほど、世界を股に活躍するのは、これら研究職員の研究室に所属する学生であり、こうした国際交流経験を多く積むことが広い視野を持った次世代の研究者の輩出につながります。

そこで本交流協定では、受け入れ側大学での授業料免除を伴うダブルディグリー制度を設置し、例えばフランス側の学生が長期に渡って本学に滞在し研究する、といったことを可能にしました。学生が主体となって国際共同研究を進める環境が整備できたことで、これまでにない活発な人的交流が展開でき、両大学からより国際的な視野を持った研究者が育つことが期待されます。また、トゥール大学には「食」にまつわる研究で有名な Institut Européen d' Histoire et des Cultures de d' Alimentation も設置されており、フランスで初めてプロの料理家に名誉博士号を授与した大学でもあります。今回の交流協定を、昆虫学以外の分野にも是非展開していただければと思っております。



IRBI とのこれまでの国際共同研究の様子。フランス領ギアナのジャングルをヘリコプターで移動し、手つかずの密林へ降り立って生物相を解明する。

## イベント情報

### 平成28年度桜楓講座(秋の部)〈京都府公立大学法人連続講座〉

最近のトピックスを交えながら、本学教員がそれぞれの専門分野についてわかりやすく講義を行います。

**Cコース** 11月5日(土) 10:00~12:00

#### 「フランス料理とポリティクス」

講師：公共政策学部 准教授 玉井 亮子

**Dコース** 11月19日(土) 10:00~12:00

#### 「各所の遊所 天橋立と宮津新浜」

講師：生命環境科学研究科 講師 松田 法子

**場 所** 京都府立大学  
稲盛記念会館1階 102講義室

**受講料** 無料(申込制)

**募集期間** Cコース：11月1日(火)まで  
Dコース：11月15日(火)まで

**申込先** 〒606-8522(住所記入不要)  
京都府立大学企画課  
FAX：075-703-4979  
E-mail：kikaku@kpu.ac.jp



## 各学部・研究科の取り組み

## 文学部

## 英語技能統合型タスクにおける足場かけ

欧米言語文化学科 細越 響子 講師

私は、大学生を対象とした英語教育における技能統合型タスクの活用に関する研究を行っています。近年、センター入試にかわって2020年度より実施予定の「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」で四技能を評価する問題の導入が検討されるなど、日本の英語教育では、目標言語で情報を適切に理解し自分の考えを効果的に表現するための英語運用能力を育成することへの関心が高まっています。

一方で、日本の学習環境では教室外で英語に触れる機会が十分ではなく、「英語で講義を聴講しレポートを書く」などの技能統合型タスクの高度な要求に比べて、学習者の英語習熟度の低いことが実施上の課題となっています。

そこで、私の研究は足場かけ(Scaffolding)という手法に解決策を見出します。学習素材には実際の英語使用場面に即したもの(例:英語圏大学の講義)を速度や語彙・文法を変えずに用いながらも、聴解の手がかりとなる事前タスクを設けることで、教材と学習者の間に「は

しご=Scaffolds)をかけます。

これまでの研究では、さまざまな種類の足場かけを比較することで、英語の理解力・発信力を向上させる指導のあり方を検討してきました。一例として、聴講した内容を英語で要約する技能統合型タスクでは、講義の重要語彙の事前指導は効果がある一方、未知語の事前指導は要旨の誤解を招くおそれがあることが分かりました。先行研究では、聴解の成功には総語数のうち95%の単語の意味を知っている必要があると主張されていますが、本研究の結果からは、個別の情報を理解していることが必ずしも全体的な論旨の適切な把握にはつながらないことが言えそうです。

2020年度からは小学校中学年より外国語活動が実施される予定で、英語教育の比重はさらに増していくことが見込まれます。

英語に関する知識の習得にとどまらず、実際的な英語運用能力の体得を目指した教育の手立てを探っていくと考えています。



## 公共政策学部

## 災害と公共政策

公共政策学科 松岡 京美 准教授

皆さんはマスコミなどで社会に起きている様々な問題を毎日目にしていると思います。そこには非正規労働者の雇用問題、地域のまちづくり、老朽化するインフラの再整備など数えきれないほどの社会問題があります。その解決を目指す公共政策をどのように捉えればよいのでしょうか。一般的には、公共政策とは個人や企業では解決できない問題への政府の対応策と定義します。そのような対応策の実施を主に担うのが行政です。

自然災害からの安全・安心は、深刻な災害被害と隣り合わせの日本において喫緊の公共政策です。災害発生後、我々はなぜ被害を防げなかったのか、なぜ被害を少なくできなかったのかと考えます。そこでは防災や減災の公共政策が期待されます。自然災害がもたらす社会問題は常に一定ではなく、その社会問題を何であると捉えるかは時とともに変化し、それに伴い対応策も変化します。最近の私の研究では、そこでの政策

の目標・理念の変化が行政の行動にどのように影響するかを分析しています。その研究成果として『災害と行政』(松岡京美・村山徹編、晃洋書房、2016)があります。具体的には、国際比較も視野に入れて、日本の行政の行動には、包括的な計画主義と適応型の改良主義での問題の改善に向けて、地方政府は「何をするか」、中央政府は「どのようにするか」の行動をとる特徴があることを明らかにしました。



松岡京美・村山徹編、  
晃洋書房、2016

行政行動の根本的な特徴を知ることは、新たな改革へと行政が進展して行く上で、何をなせばいいかの判断基準を具体的に考えることに役に立つと思います。そのような行政行動に注目する研究は、人々や組織の考え方、行動の仕方を比較研究する政治文化論のアプローチを用いて、公共政策にせまろうとする「政策文化論」です。今後さらに研究を積み重ねて、公共政策の探求に知見をもたらす新たな研究領域としての政策文化論に、向き合っていきたいと考えています。

## 各学部・研究科の取り組み

## 生命環境科学研究科

## 分子育種技術の正しい理解促進に向けて

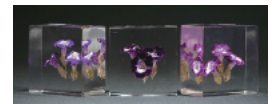
応用生命科学専攻 植物育種学研究室 大坪 憲弘 准教授

分子育種という一昔前まではほぼ遺伝子組換えと同義に扱われていましたが、その後様々な作物種でゲノム配列の情報と有用形質にリンクする分子マーカーが整備されたことで、従来の育種技法そのものを効率化するために活用できる技術として位置づけられるようになってきました。これに加え、遺伝子組換えの様々な問題を克服する新たな育種技術として期待されるゲノム編集が、微生物や動物だけでなく植物においても実用的な技術として普及し始めるなど、基礎研究と実用化研究の距離はより一層縮まりつつあります。

このような状況にあって、関連する様々な技術やそれらを用いて作出したプロダクトを社会に受け入れてもらうためには、低コストで信頼性の高い技術やニーズに応える高品質な生産物を提供することに加え、技術面や安全面でのより多くの情報を迅速に正しく提供し、それらに対する理解を深めてもらうことがとても重要です。遺伝子組換え技術を利用して作られた医薬品、酵素、農産物などが私たちの身近なところでこれだけ普及しているにもかかわらず、多くの人が依然としてネガティブなイメージをめぐいきれないのは、技術の急速な普及に対してこのような情報提供が後手に回ってしまったことが大

きな要因の一つとされています。私たちは、育種を効率化する技術の開発や作出したプロダクトの実用化の過程で求められるあらゆるスキルの向上や人材の育成も研究や教育の重要なテーマの一つであると考えています。

例えば私たちの研究グループでは、従来の育種技術と最新の分子育種技術を組み合わせることでこれまで500種類以上の新しい花色や花形を持つ花きを作出してきましたが、これらをいつでも手にとって観察できる樹脂封入標本教材(写真)を開発し、高校や大学での授業やサイエンスカフェでの利用を進めてきたほか、蛍光タンパク質を大量に蓄積する「光る花」やこれを組換えの規制に正しく適合した形で展示するための展示ケースの開発と博物館等パブリックスペースでの展示、各種メディアへの発信など、一般にわかりやすい形で技術や製品を身近に感じられるプレゼンテーションを実践してきました。こういったいわゆるサイエンスコミュニケーションの取り組みを、今後は地域での連携や異分野とのコラボレーションも視野に入れつつ拡大し、適切な情報提供と理解の促進をさらに進めていきたいと考えています。



遺伝子組換え花きを色や形を損なわずに樹脂に封入するシステムを整備し、標本教材キットを作成しました。教材以外にもインテリア等での利用・普及も期待できます。

## 地名と気候の関係を探る

環境科学専攻 建築設備学研究室 長野 和雄 准教授

その地の自然の性質を表した地名を自然地名といいます。とくに地名の最小単位である小字(コアザ)は近隣と区別できるように異なる名が付けられるため、その地の地形・地質・気候などの特徴を端的に表しているといわれています。例えば、日裏・日浦(ヒウラ)は「うららか」に由来するとされ、日当たりが良い地、逆に陰地(オンジ)はまさに字のごとく日陰になりやすい地とされています。しかし、いつからその地名で呼ばれるようになったのかは、わからないくらい昔の話です。果たして、本当に日当たりと地名は関係があるのでしょうか。

日裏や陰地の小字が数多く残る奈良県旧宗檜村(現・五條市)を対象に収集した198番地分の日向地名・95番地分の日陰地名の所在を確かめると、日向地名のほとんどが南向き斜面に、日陰地名のほとんどが北向き斜面に分布し、日射量も日向地名の方が多かったです。

その地の日照条件に相応しい地名だったわけです。

東日本大震災で津波に見舞われた地域には、過去に水害があったことを窺わせる地名が数多くあるそうです。府大の所在地である半木町(ハンギチョウ)も、かつてはナカラギと読み、漢字では「流木」と表しました。普段は穏やかな鴨川(写真)ですが、ときに大きな氾濫を起こすことを教えてくれます。建築の研究室でなぜ地名の研究?と思ったかもしれませんが、居住地や農耕地としての適否を後世に伝える手段と捉えると、地名は住まいや暮らしを考える上でとても重要であることがわかってもらえるでしょう。



そんな地名ですが、流木(ナカラギ)から半木(ハンギ)になったように、由来も薄れるほどに変わってしまうことがあります。小字も現在は住居表示として使われず、次第に忘れられるようになりまし。ただ単に地名がなくなるだけでなく、古からの伝承も同時に失われるとしたら…ちょっともったいない気がしませんか?

## 受賞情報

## 文学部

歴史学科 岸 泰子 准教授

## 日本建築学会「奨励賞」受賞

2016年日本建築学会において、論文「中世後期の天皇崩御と触穢—内侍所の変化を中心に—」が「奨励賞」を受賞しました。

## 公共政策学部

公共政策学科 杉岡ゼミ

全国大学まちづくり政策フォーラムin京田辺

## 「NPO法人政策マネジメント研究所奨励賞」受賞

第10回全国大学まちづくり政策フォーラムin京田辺（主催：全国大学まちづくり政策フォーラムin京田辺実行委員会）において、杉岡ゼミ（受賞時3回生の梶健太さん、繁光拓樹さん、武田さつきさん、西村優華さん、山崎夕莉さん、山村彩衣佳さん、渡辺健太さん）が「TANABE HOUSE～多世代交流型住居の創設～」の発表により「NPO法人政策マネジメント研究所奨励賞」を受賞

生命環境科学研究科  
応用生命科学専攻

博士前期課程2回生 小林 正幸 さん(応用昆虫学研究室)

日本昆虫学会・日本応用動物昆虫学会合同大会  
「英語口頭発表賞」受賞日本昆虫学会第76回大会・第60回日本応用動物昆虫学会大会合同大会において、「Genetics of performance and preference in *Acrocerops transecta*」の発表により、「英語口頭発表賞」を受賞しました。（受賞時：博士前期課程1回生）

博士前期課程2回生 濱谷 昭寿 さん(応用昆虫学研究室)

日本昆虫学会・日本応用動物昆虫学会合同大会  
「ポスター賞」受賞

日本昆虫学会第76回大会・第60回日本応用動物昆虫学会大会合同大会において、「落葉虫からゴール形成者へと変貌するヒサカキホソガ幼虫の生活史と発現比較に向けた飼育法の確立」の発表により、「ポスター賞」受賞しました。（受賞時：博士前期課程1回生）

博士前期課程2回生(受賞時) 田代 有希 さん(生命分析化学研究室)

## 日本ベドロジー学会「ポスター賞」受賞

日本ベドロジー学会2016年度大会において、「2:1型粘土鉱物への放射性セシウムの吸着に及ぼす有機物と水酸化アルミニウムポリマーの相対的な阻害効果」の発表により、「ポスター賞」を受賞しました。

博士後期課程1回生 加茂 翔伍 さん(機能分子合成化学研究室)

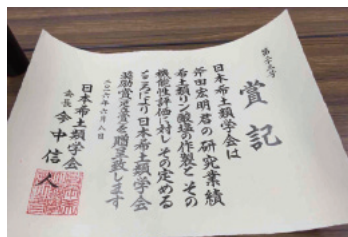
## 日本薬学会136年会「学生優秀発表賞」受賞

日本薬学会136年会において、「Juglocombin A, B 及び Juglorescein の全合成研究」の発表により、「学生優秀発表賞」を受賞しました。（受賞時：博士前期課程2回生）

斧田 宏明 講師(材料化学研究室)

## 日本希土類学会「奨励賞（足立賞）」受賞

2016年度日本希土類学会において、「希土類リン酸塩の作製とその機能性評価」の題目により、「奨励賞（足立賞）」を受賞しました。



博士前期課程1回生 吉岡 快 さん(機能分子合成化学研究室)

## 有機合成若手セミナー

## 「明日の有機合成を担う人のために」 「ポスター賞受賞」

第36回有機合成若手セミナー「明日の有機合成を担う人のために」(主催：有機合成化学協会関西支部・日本薬学会近畿支部)において、「生合成経路を模倣した Juglomycin 類の網羅的合成」の発表により、ポスター賞を受賞しました。

## 環境科学専攻

博士前期課程1回生 松野 千華 さん(砂防学研究室)

## 砂防学会「若手優秀発表賞」受賞

平成28年度砂防学会研究発表会富山大会において、「土石流の流体相密度の形成機構」の発表により、「若手優秀発表賞」を受賞しました。

博士前期課程2回生 安達 太郎 さん(森林計画学研究室)

## 日本森林学会大会「学生ポスター賞」受賞

第127回日本森林学会大会において、「航空レーザーデータを用いた Valley-following法による単木抽出の精度および関連する森林情報の推定」の発表により、「学生ポスター賞」を受賞しました。（受賞時：博士前期課程1回生）

博士前期課程2回生 安達 太郎 さん(森林計画学研究室)

## 森林GISフォーラム学生研究コンテスト「優秀賞」受賞

第127回日本森林学会大会において、「航空レーザーデータを用いた Valley-following法による単木抽出手法の開発」の発表により、「優秀賞」を受賞しました。（受賞時：博士前期課程1回生）

博士前期課程1回生 吉永 生 さん(森林計画学研究室)

## 森林GISフォーラム学生研究コンテスト「優秀賞」受賞

第127回日本森林学会大会において、「Network Analystを用いた四万十式高密度路網地における人工林搬出間伐作業のコストシミュレーションと採算性把握」の発表により、「優秀賞」を受賞しました。（受賞時：生命環境学部4回生）

博士前期課程2回生 小仲 美穂 さん(建築環境・設備学研究室)

## 人間・環境学会大会「発表賞」受賞

人間・環境学会第23回大会において、「単身者住宅の室内環境・暮らし方に関する調査研究—京都市内の学生を対象として—」の発表により、大会発表賞を受賞しました。

# ニューフェース



文学部 歴史学科  
准教授 <sup>きし</sup>岸 <sup>やすこ</sup>泰子

〈主な研究領域〉  
日本都市・建築史

建築・都市史はこれまで工学の分野で捉えられてきましたが、近年は歴史学といかに向き合うのかが問われるようになってきました。私は、場の特性に着目して、古文書を用いながら近世の禁裏と都市社会のありかたについて研究しています。また、文献史学とも協同しながら歴史的建造物の調査や保存に関わっています。今後は文化遺産が多く残る京都を拠点に、モノと場に立脚しながら広い視野から都市・建築史を展開していきたいと考えています。



公共政策学部 公共政策学科  
准教授 <sup>かつやま</sup>勝山 <sup>とおる</sup>享

〈主な研究領域〉  
地域政策、非営利組織

人が暮らしていくのに都合が良い場所に集まることで、地域社会が形成されています。その住まう人々(住民)が暮らしやすい環境を整え、維持するためには、各時代の生活環境や社会構造の変化等に対応していくことが必要となりますが、その対応の過程で様々な課題に直面することになります。そうした課題に住民が主体的に取り組まれる事例を通して、地域社会を形成する住民、行政、非営利組織等のあり方や相互の関係性について考察していきたいと考えております。



生命環境科学研究科 応用生命科学専攻  
准教授 <sup>よしもと</sup>吉本 <sup>ゆうこ</sup>優子

〈主な研究領域〉  
栄養教育(食育)、公衆栄養学

教育では行動変容を促すことが重要であり、栄養教育においても自ら行動に移そうとする意欲を対象者に持たせるため、「やってみたい」、「楽しい」と思わせる仕掛け、仕組みが必要となります。そのような仕掛け、仕組みを、ICT(情報通信技術)や体験型学習により創り出そうとしています。そのような栄養教育プログラムの開発を通じて、実践能力(コンピテンシー)を備えた管理栄養士の育成に貢献していきたいと考えています。

## 退職教員からのメッセージ

### 公共政策学部 公共政策学科 杉岡秀紀

2012年に着任早々、地域連携センター副センター長と京都政策研究センター企画調整マネージャーを拝命し、とにかく大学の地域連携のことを考え、産学公NPOの皆さんとセクターを越えながら対話しながら走って来た約5年間でした。教育研究においては「臨床政策」に共感するゼミ生たちと府北部から南部まで、色々なまちに関わりながら、様々なアクションをこし、毎年多くの学会や政策コンペにも出場してきました。彼らとの出会いこそが府大での一番の思い出であり、最高の宝で

す。お世話になった教職員の皆さま、そして卒業生も含め学生の皆さん、今までどうもありがとうございました。最後になりましたが、今後も同じ公立大ですので、緩やかに連携できればと思考しております。これからも引き続き宜しくお願いいたします。



### 公共政策学部 公共政策学科 松田 貴文

9月いっぱい京都府立大学を去ることになりました。まずは、短い期間で去ることになってしまったことにつきまして、お世話になった方々や学生にお詫び申し上げます。私にとって

京都府立大学は最初の赴任先であり、人生の大事なページをここで書き始めることができたことを心から嬉しく思っております。字数に限りがありますので大事なことをひとつだけ。講義や学生との会話は私にとって新しい刺激の場でした。授業など少しでも私とかかわった学生諸君、ありがとう！